

未来探しの日本一周

～15500km で見えた地域と自分の姿～

CM21-1004F 商学部マーケティング学科4年 赤川凌

はじめに

私は2024年の4月から4年生に上がるタイミングで1年間休学をし、148日間・総走行距離15500kmに及ぶスーパーカブ（バイク）での日本一周の旅に挑戦した。本作品は日本一周することを決断した時からゴールするまでのことと、そして復学・就職活動を経て得た学びと自分の変化をまとめたものである。



148日間の行程（15500km）

赤線→走った行程 黄線→フェリーでの行程

期間 2024年6月1日～12月18日



旅をしていたホンダスーパーカブ110

学生生活と日本一周に挑戦した動機

まず、日本一周に挑戦したいという想いにたどり着くまでの流れを述べていきたいと思う。日本一周に挑戦しようと思った動機は、自身の就職活動と深く関わりがある。私が専修大学に入学した2021年、世間はコロナ禍の真っただ中だった。大学もオンライン授業がメインとなり、友人ともなかなか会えない時期が続いていた。そんな中、家でオンラインの授業を受け、アルバイト先と家を往復するうちになにか新しいことに挑戦してみたく

なり、大学一年の春休みに一人旅を試みることにした。最初に選んだ旅先は四国。旅の計画を立て、行きたい場所に辿り着くために電車とバスを乗り継ぎ、ようやくたどり着いた場所で景色を眺めたり、その土地の文化に触れたり、現地にいる方とコミュニケーションを取るのとは当時19歳の自分にとって、とても刺激的で面白い体験だった。それ以降、長期休みに入るたびに大きな一人旅をするようになり、2週間かけて在来線で本州縦断をしたり、北海道をぐるぐる回るような旅をしたりしているうちに、自分はすっかり食や文化・景観といった各地が持つ地域の魅力にハマってしまっていた。大学3年生になり将来や仕事について考えるようになった頃、一人旅は趣味だけでなく「各地の魅力を広めたり、地域に関わったりする仕事がしたい」という将来の目標を持つきっかけになりつつあった。そうして就職活動を始めてみたが、どのように地域に関わりたいのかが明確でなかったことと、47都道府県の半分程度しか周れておらず、全国の地域をイメージしきれてないことに悩み、うまく進めることができなかった。3年の2月頃、どうすればこの2つの課題が解決されるかと考えた時に、出てきた答えが「日本一周」というものだった。すぐに色々な旅人の記事を検索して、日本一周に必要な期間と予算と準備の見積もりを作り、挑戦するべきかどうか3日間ほど悩んだが、なかなか決め切ることができなかった。そのため、ゼミの教授や周囲の大人に相談をした。その中で、相談した一人に「ワクワクする方の選択肢を選んだらいいんじゃないかな？」とアドバイスをもらい、その言葉がきっかけで「挑戦しよう」と決心することができた。その後、自分で作った資料を交えながら親と話し合いとプレゼンを重ね、休学の許可をもらえた次の日には休学届を大学に提出し、思い立ってから2週間後には日本一周のスタートラインに立っていた。

準備と計画（テーマ設定）

休学届を出したあと、必要な準備をリストにまとめ一つ一つこなしていった。まず取り組んだのが、旅のテーマ設定である。今回の日本一周は三つテーマを決めた。一つ目が「一次産業の現状を知る」というものだ。地域の文化や町並みは一次産業と大きく関わりがあることをこれまでの一人旅を通して学び、各地の一次産業の歴史と地域の関係性について知りたいと思ったこと、また東京のスーパーの価格変動だけではわからない、環境的な一次産業の今を知りたいと思いこのテーマを設定した。二つ目は「全国の伝統工芸を知る」というものだ。これまでの一人旅で、各地で販売されている工芸品を見る機会があり、その工芸品が地域の歴史や文化とどのように関わりがあるのか興味があったが、短い期間では知ることができなかった。そのため、今回の機会で知りたいと思い、このテーマを設定した。具体的には、電話でアポを取り職人の方に直接お話を聞きに行ったり、可能なものは体験等を通して自分の手で作ってみたりするというものだ。三つ目は「現地の人と毎日必ず会話をする」というものだ。旅人という外の視点だけではその地域についてわからないことも多いため、できる限り旅先で出会った人と会話をし、自分の旅のテーマを話し

ておすすめの場所や人を紹介してもらいながら、その地域の解像度を高めることを意識した。また、これらのテーマのもと、その日得た情報や考えをアウトプットする手段として、毎日撮った写真と共に Instagram に日記を書くこととした。

テーマを決めた後、早速荷物や移動手段の準備に取り掛かった。完全な日本一周の持ち物リストは存在せず、時期や地方によっても防寒着など必要なものが異なるため、ネットに載っている過去に日本一周していた人の記事や YouTube の動画を見ながら、自分なりの持ち物リストを作成し、や衣類、工具や自炊用のカセットコンロなど、ホームセンターや大きいスーパー、ネット通販を行脚して、試行錯誤しながら荷物をそろえた。また、日本一周の移動手段として期間や体力的な側面からスーパーカブというバイクを選んだが、免許を持っていなかったため教習所に通うところから準備が始まった。バイクに全く馴染みが無かったため、教習のはじめは慣れるのに苦労したが2カ月ほどかけて無事免許を取得することができた。その後、キャンプ場でテントや自炊の練習をしたり、全国の回り方の計画を立てたりしながら春の期間を過ごし、2024年6月1日、実感が湧ききらないまま、出発の日を迎えた。



旅中にバイクに積んでいた荷物一覧



旅日記の Instagram アカウント

一周中に苦労したこと

日本一周では、「活動」の部分よりも体調やメンタルなど「内的」な部分と「環境的」な部分の難易度が高かった。中でも苦労した二点について述べたい。一つ目は「気候」である。バイクで野宿（キャンプ）をしながらの旅は、最後まで天候に翻弄され続けた。最初はどうのように気候と向き合えばいいかわからず、目的地に向かいたい一心で進んだ結果、夕立に遭遇して荷物が水浸しになることもあった。「どうしたらいいんだ！」と叫びたくなることもあったが、日数をこなすうちに、二つの天気予報アプリを利用して深刻な結果の

予想を採用し、「できる限り濡れない、濡れるなら動かない選択肢を取る」という自分のルールを設定するようになってから、うまく進めるようになった。また、最低気温と最高気温が日常の基準の温度になるため、夏は熱中症にならないよう、冬は寒さで体調を崩さないように気を遣いながら、屋内で休息を取って体調管理するということにも神経を使った。2つ目は「自分と向き合い続けるということ」である。148日間の旅の中では、毎日トラブルに遭遇していた。田舎道でバイクの後輪タイヤがパンクし、2km先の最寄りのバイクショップまで150kgほどあるバイクを引いて歩いた時の「人生で一番長い2kmじゃないか!」と思った当時の瞬間は、今も鮮明に思い出すことができる。別の日には、ゲリラ豪雨で全ての衣類と荷物が絞れるくらい濡れてしまい、前日洗ったばかりの衣類をもう一度洗うはめになったこともあった。さらに大雨によって道路が通行止めになり、100kmほど進んで来た道を泣く泣く引き返したこともある。深夜のテントに大きいクモやカブトムシが出没し、パニックになったことも多かった。これらのトラブルは、どんな状況であっても自分で解決しなければならず、加えて毎日の食事や体調管理など、生活の細部まで常に自分と向き合う必要があった。また、当初は綿密に立てたスケジュール通りに進もうとするあまり、計画通りにいかないことに強いストレスも感じていた。結果、自分と上手く会話ができず、「苦しい」と感じる時間が多かった。そのため、旅の中盤から一日の行動の出力を80%くらいにして、日常に余白を持たせるように心がけるようになった。事前にスケジュールを決めすぎずに、その状況のベストな選択肢を取りながら旅を進めることを意識したこと、そしてInstagramの日記を通して自分の思考を整理することで、自分の機嫌をうまく取りながら進むことができた。

旅に出てわかったこと（一次産業・工芸・ボランティア）

148日間の中で、計22人の伝統工芸の職人の方にお話をお聞きし、2件の一次産業のお手伝い、そして能登の災害ボランティアに参加することができた。それぞれについて、印象に残っていることや周りの人に伝えたいと思ったことを述べていきたい。

まず一次産業について、漁業は「海水温の上昇」、農業は「高温や虫害」によって被害を受けているということが分かった。北海道の礼文島で出会った漁師の中野栄吉さんは、「礼文島はムラサキウニやエゾバフンウニという種類のウニが獲れて、ウニ漁は漁師の収入の三分の二を占める。しかし、今年は例年の十分の一しか取れていないし、稚貝というウニの赤ちゃんも育てていないから来年はもっと捕れないだろう。このままでは島の漁が産業として成り立たなくなってしまうかもしれない。ここ10年で見たことのない海藻も生えるようになった。海はどんどん変わってしまっている。」と島の水産業の現状を詳しく教えてくれた。また、ボランティアとして参加させていただいた滋賀県東近江市の梨農家・福永久嗣さんは「日差しが強すぎて、梨がどうしても傷んでしまう。そして今年初めて虫害がでってしまった。30年栽培していて、こんなことは初めてだ。」と話をしてくれた。全国で

話を聞く中で、漁業であれば「近海で獲れないが、沖へ出ればまだ獲れる」や「環境の変化に加えて高齢化も相まって、漁自体やめてしまった」、「海水温の上昇率が高くて、天然の海藻が壊滅的」など地域によってダメージの差はあるが、どれもネガティブな変化だった。現場で携わっている人は危機感を持っているが、まだまだ都市部の消費者と捉え方にギャップがある。まずはできる限り多くの人がこの問題を知って、食という分野の当事者として考えることが大切だと感じた。しかし、それ以上に各地の食の美味しさには感動するばかりで、この旅を通してますます日本が大好きになった。

次に伝統工芸について、人不足は共通の問題として、工芸それぞれの課題を抱えていた。

「細川紙」という和紙の産地である埼玉県小川町では、「作る人も需要も減ってしまっているけれど、和紙を作るには特注のボイラーや大量の水が手に入る環境が必要で初期投資が大きくかかってしまう。職人の育成はしたいが、誰かが引退して工房が空かない限り、簡単に育成するという事は難しい」と和紙特有の課題を抱えていた。また、岡山県備前市で備前焼作家の石田和也さんにお話をお聞きした時は、「備前焼は田んぼの土などで作られるが、段々と土が採れなくなっている。代替策や新しい表現として近くの鉾山の陶石を使い、備前磁器という新しい表現を模索している」と教えてくれた。沢山の職人の方のお話をお聞きしたが、どの方も共通して仰っていたのが「道具を通して、その時間が豊かになるモノづくりを目指しているし、豊かさを少しでも感じてくれたら嬉しい。」という思いだった。課題を抱えつつも、自分ができる表現や提供できる豊かさを模索しながら、モノづくりに取り組む伝統工芸士の方々が本当にかっこいいと感じたし、自分もいつか作る側として工芸に携わってみたいという目標ができた。

また、1日だけだったが、能登の災害ボランティアにも参加をした。珠洲市で民家の家財運びだしを手伝ったが、現場で何よりも感じたのが「ニュースやSNS で見ていた情報と実際に見た情報のギャップ」だった。映像で見るよりも自分の目で見た街の被害は大きく、違う地域では何事もなく日常が流れているが、現場では目の前の現実と向き合いながら過ごしている方々がいた。このボランティアを通して、「自分の目で直接見て、当事者として考えて、初めて本当の意見を持つことができる」ということを強く感じた。これは、世界で行われている戦争や様々な問題にも当てはまることだと思う。どんな時でも、「できる限り自分の目で見て当事者として考える。そして今自分にできることを考える。」ということ大切にしていきたいと思うようになった。



滋賀県東近江市

福永農園での収穫お手伝いの様子



岡山県備前市

備前焼作家石田和也さんへの取材時の写真



石川県珠洲市

災害ボランティアの活動時

旅を通して自分の中で得たこと

日本一周に挑戦した半年間を通して、書ききれないほどの学びや気づきを得ることができたが、その中でも、旅を終えた今も大切にしていることを二つ述べようと思う。一つ目は「大きい目標でも、ゴールを細分化して1つずつ達成していけば叶えられる」ということだ。過去の自分は、受験など大きい目標を設定することができる時でも、現時点の立ち位置を鑑みて、現実的な目標しか立てていなかった。しかし日本一周は、バイクも乗ったことがない、テントを立てたこともない、0からの挑戦だった。出発した初日は「本当に達成できるのだろうか？」と半信半疑のまま走っていたが、日本一周の中でも一日を切り取ると、毎日目的地を設定して、100kmほど進みながら、現地で人とコミュニケーションを取り、食事、洗濯、入浴など生活をきちんと営むという、決して不可能ではない習慣の連続にある。その習慣を148日間積み重ねて、自分は日本一周をやり切ることができた。148日目のゴールの東京駅で感じたのは、大きな達成感ではなく「意外と日本一周ってできてしまうものなんだな」という感想だった。この日本一周を通して、大きい目標でもゴールを細分化して一つずつ達成していけば大きい目標も叶えることができるということに気づくことができた。この考え方は就職活動でも、大きな心の支えになったと感じている。二つ目が「何歳からでも何者でも目指せる」ということだ。半年間、毎日沢山の方々とお会いし、色々な人生のお話お聞きした。秋田で出会った脱サラして60歳から伝統工芸士を目指した方や、沖縄のゲストハウスで出会った40歳から仕事と並行して勉強しながら医師を目指している方、愛媛で出会った、20代で離島に移住して島で唯一のカフェを運営しているご夫婦、北海道で出会った自分が住みたいと思う土地を探してキャンピングカーで日本中を旅しているお兄さんなど、毎日多様な方と出会い、お話をしたが、本当に素敵な方ばかりだった。素敵な方々の共通点は「自分なりの豊かさを追求し、行動に移している」ということだ。自分なりの豊かさを追求することが、その人自身の個性やアイデンティティに繋がるし、行動に移すことで自分が目指す豊かさを実現することに繋がる。過去の自分は「周りからの目線や世間体」を気にしてしまうこともあったが、日本一周を通して何を自分の軸にするべきかを明確にすることができた。決断した際や旅中、この挑戦が将来に本当に繋がるのか不安になることもあったが、旅をすることや地域が好きであること、地域に関わる仕事がしたいという想いは自分らしさそのものであるし、日本一周に挑戦するという行動そのものが、「将来のしたい仕事や自分なりの豊かさに繋がるんだ」という自信を、旅中の人のつながりの中で得ることができた。そして出会った方に見せてもらい続けた、「何歳からでも何者でも目指せる」という確信は、これからも心に中に持ち続けたいことの一つになった。

就職活動とこれからについて

日本一周を2024年の年末に終えた後、2025年に入り就職活動に取り組んだ。自己分析をする中で、1年前、旅に出る前に答えが出なかった「仕事の中でどのように地域に関わりたいのか」という問いにもう一度向き合い、自分の中で出たのが「日本の人に日本の魅力を伝えられる仕事がしたい」、「地域の一次産業を支えることに携わりたい」という答えだった。日本一周をする中で出会った、全国の地域の景観や食・文化といった魅力は、旅に出なければ知らなかったことばかりだった。今度は知る側ではなく、伝える立場として、より多くの人に地域に興味を持ってもらい、自分が旅を通して日本の各地を好きになったように好きになってもらいたいという想いが一番に出てきた。また、各地で話を聞いてきた一次産業の現状は、旅に出る前の想像よりも深刻であると感じた。食という分野の中で一次産業は自分にも関わりがあるし、日本一周を通じて、出会った各地の食の魅力を今の人も未来の人も繋いでいきたいという想いが、旅を通して自分の中に芽生えた。

この想いを軸に就職活動を行い、私は大学卒業後、自治体のふるさと納税支援の仕事に就く。ふるさと納税は、自分の好きな市区町村に対して寄付をすることで、寄付した分が所得税・住民税から控除される制度のことだ。寄付した市区町村からは返礼品を受け取ることができる。具体的な業務としては、自治体のふるさと納税の税収を最大化するためにウェブマーケティングの視点から支援を行ったり、地域の漁業における未利用魚をブランド化して、ふるさと納税の返礼品に活用したりするということを行っている。

旅行などで全国の地域に興味を持つのはなかなか難しいが、ふるさと納税では、制度を利用している日本中の大人にアプローチができ、納税という制度の中で、気軽に地域とのつながりを作ることができるというのが、ふるさと納税という領域を選んだ理由だ。また、未利用魚のブランド化についても、「できる限りロスを減らして、一匹の質を高めていくことが必要」という視点の元、地元の漁協や漁師の方と仕組みづくりに取り組んでいることにも共感したことが理由だ。元々新卒採用をしていない会社だったが、会社の問い合わせフォームにメールをして面接を受けさせてもらえないかダメ元で聞いたところ、OKの返事もらい2回の面接を経て、内定をいただくことができた。自分は今の進路にとっても納得ができています。今回いただいたご縁は日本一周という挑戦と、旅で得た気づきがあって結びついたものだと思う。この旅を通じて、「仕事としてどう地域に関わりたいか」という将来の方向性と、自分なりの大きな目標を叶える方法、そして沢山の素敵な人のつながりを得ることができた。自分にとって今回の日本一周は単発的な挑戦ではなく、これから長い人生の全ての種となるものだと考えている。得た気づきや出会いを大切にしながら、自分にとっての豊かさとは何かを考え続け、これからも行動に移し続けていきたい。そして148日間、沢山の方に差し入れやInstagramを通しての応援をいただいた。苦しい時間も多かったが、毎日出会う方に助けられ続けて日本一周をやり切ることができた。沢山与えてもらった分、仕事やこれから出会う人に対して、恩を返していけるような人で

あり続けたいと思う。

↓日本一周で関わりを持ち、一緒に写真を撮ってくださった方々(掲載許可済み)

